エース

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エース

【Ｎコード】
Ｎ８０４８Ｅ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
球界のエース赤藤雅夫。故障しぼんやりとした日々を送ることになった彼の目の前に現われた少女は。故障から立ち直るにはメンタルに関することも重要だそうです。

第一章

エース

かつては最多勝を何度も獲得した。最優秀防御率も奪三振もタイトルを手に入れてきた。球界で最高のエースとまで謳われ自分もその気になっていた。

赤藤雅夫。黄金の左腕とまで言われてきた。高校卒業と共にプロ入りし一年目から大活躍だった。チームを日本一に導いたこともあった。しかしだった。

二十九歳の時だった。ペナントが終わった直後だった。彼の肩に異変が起こった。最初は何でもないものと思っていた。だがそれは残念なことに大きな間違いだった。

「手術が必要！？」

「はい」

医者にはっきりと言われたのだった。

「このままでは血が流れなくなってそれで」

「投げられなくなるのか」

「それどころではありません」

診察室での話が続く。二人向かい合ったうえで。

「このままではその右腕が」

「右腕が」

「はい。おわかりですね」

「ええ」

医者の言葉にこくりと頷いた。もうそれで話がわかる。

「ですから是非手術を」

「けれど腕にメスを入れると」

赤藤は顔を強張らせて言う。右腕は精密機械だ。ピッチャーにとってはそれ以外の何者でもない。だからこそそれを受け入れるわけにはいかなかったのだ。

「俺は」
「それでもです」
だが医者は言うのだった。
「このままでは右腕は」
「わかっています」
もうそれはわかっている。わからない筈もない。
「ですが下手をすれば」
「安心して下さい」
だが医者の返事はしっかりしたものだった。はっきりとした声で彼に言うのである。
「貴方の腕は何があっても」
「治してくれるんですね」
「私は医者です」
次の言葉はこれであった。
「貴方がピッチャーであるのと同じく」
「同じですか」
「貴方は投げてチームに勝利をもたらすのが仕事ですね」
「その通りです」
強い声での返事になっていた。それが自分でもわかる。
「それと同じく私の仕事は」
「貴方の仕事は」
「患者を治すことです」
そのことをはっきりと語るのだった。
「ですから。是非共」
「そうですか。それじゃあ」
「はい、私を信じて下さい」
言葉だけではなかった。声もまたはっきりとしたものになっていた。
「ですから。宜しいですね」
「わかりました。それでは」

ここまで言われては彼も覚悟ができる。伊達に球界で最高のエースとまで言われてきているわけではない。医者の言葉にすぐに頷いてみせた。
「御願いします」
「はい。では手術の日は後程」
こうして彼は手術を受けることになった。話はこれで纏まった。程なくして手術となり彼の右腕にメスが入れられた。スポーツ新聞の記事では大した内容ではなかった。
「こうしたことはよくありますからね」
「はい」
赤藤はベッドに寝ていた。そこで医者と話をしている。医者は彼の枕元に立ってそこで赤藤が広げているスポーツ新聞を見ながら話をしているのである。
「実際のことは秘密です」
「貴方もそうですね」
「まさか自分がこうなるとは思いませんでした」
言いながらここで自分の右腕をチラリと見るのだった。
「全く」
「とりあえず手術は成功です」
医者はこのことを告げた。
「後は時間が経てば」
「何時から復帰できますか？」
赤藤にとって最大の関心はそれであった。何時復帰できるか。だからそれを聞かないわけにはいかなかったのだ。実際にそれを聞いてきた。
「俺は。何時」
「手術は成功しましたがやはり右腕がなくなりかねない程でしたので」
「かなりかかりますか」
「申し訳ありません」

頭を垂れて赤藤に告げてきた。
「少なくとも六月には」
「そうですか。かなり長いですね」
「腕以外のトレーニングはいいです」
それは保障するのだった。
「ですからランニング等は」
「ええ、それは助かります」
それを聞いてまずは安心する赤藤だった。ピッチャーは下半身も重要である。彼とて例外ではなくその足腰はかなりのものだ。毎日何十キロも走り込んでもいる。トレーニングは欠かしていないのだ。
「少しでもそうしてトレーニングを積んでおかないとね」
「はい。ですから退院後は」
「わかりました。まずは下半身を」
その話はすぐに決まった。しかしであった。
「けれど。それでも」
「無理はなさらずに」
何はともあれ退院後早速赤藤のトレーニングは再開された。言うまでもなく復帰の為でありランニングを中心として日々続けられた。だが右腕だけは動かなかった。
「もう復帰しているのか」
「案外早いな」
チームメイトもマスコミもそんな彼を見てこう言い合っていた。彼等は何も知らなかった。赤藤の右腕が本当はどういった状況なのかを。
「まだか」
時折己の右腕を見て呟くのだった。
「動かない。まだ動かせないか」
「足腰は健在だな」
「後は待っていればいいな」
周りは無責任な楽観論を述べるだけだ。しかし彼は違っていた。

やはり右腕は治ったと実感できない。それでもそれを心に押し隠してトレーニングを続ける。来る日も来る日も走り続ける。ただひたすら走っていた。

その彼が走る川辺で。ふと自転車と擦れ違った。そこに乗っていたのは黒く長い髪を持つ少女だった。大人びた顔立ちの背の高い少女だった。

「奇麗な娘だな」

赤藤のその娘の横顔を見ての最初の感想だった。

「モデルかな。違うか」

すぐにその可能性は否定した。

「高校生かな。まあいいさ」

すぐに考えをそこから移した。そしてまた走りはじめる。何キロも何キロも走る。まるでそれで生きているかのように。彼は走り続けていた。

ある日病院に行った。そこでまたあの医者と話をする。話すことは一つだった。己の右腕のこと、それしかなかった。それ意外話すことはなかった。

「順調かな」

「そうですかね」

医者の言葉に対して赤藤は懐疑的な顔だった。

「だといいんですけれど」

「何だ、あまり期待していないみたいだな」

「正直のところ不安です」

率直に己の感情を告げたのだった。

「本当に治るのかどうか」

「治るよ」

彼に対する医者の言葉はしっかりとしたものだった。実に医者らしい言葉だった。

「絶対に。六月には」

「今二月です」

彼の頭の中ではもう月日のことも完全に入っていた。復帰したい、そのことだけが頭の中にある。しかしそれと共に不安も沸き起こって仕方がなかったのだ。

第二章

「あと四ヶ月で。まだ右腕も動かせないのに」
「だから。焦ってはいけないんだ」
医者の言葉は変わらない。慎重なままだった。
「焦っては何もかも駄目になってしまうよ」
「それはわかっています」
答える。わかっていない筈がない。しかしなのだ。
「ですがそれでも」
「焦ってしまうんだね」
「はい」
またしてもはっきりと述べるのだった。
「どうしても。右腕で投げたいです」
「気持ちはわかる。けれど今は」
「まだですか」
「確か君は普段は今になったらもうピッチングをはじめている頃だったかな」
「ええ、まあ」
その通りだった。実は彼は普段は二月になると少しずつピッチングをはじめていく。寒さに気をつけてあまり投げないにしろだ。それでも投げていた。
「ですが今はとても」
「だから。焦っては駄目なんだよ」
またそこを念押しする医者であった。
「何があってもね。そう」
「そう？」
「四月だな」
彼は赤藤に言った。
「四月に少しずつ投げはじめればいい。少しずつな」

「少しずつですか」
「だから。焦らないことだよ」
またしても念押しするのだった。
「何があっても。いいね」
「わかりました」
憮然とした顔で頷く。焦りも不安もどうしても抑えられない。どうしても。だがそれでもトレーニングは続ける。投げたい気持ちを必死に抑えて走り続ける。下半身は鍛えられていく。
この日もまた走っていた。それを見た女子高生達が色々と話していた。五人程いる」
「あれ赤藤じゃないの？」
「あっ、本当だ」
「最近ここで走ってるよね」
「確か怪我していたんだっけ」
「左手を？右手だったかしら」
どうも彼のことはあまりよくは知らないらしい。それがわかる会話であった。赤藤も彼女達の話はただ聞いているだけで黙々と走っている。
「あれだけ走れるんだったら大丈夫じゃないの？」
「そうだよね、大丈夫だよ」
「今年中に復帰？」
マスコミの話をそのまま鵜呑みにしたような会話である。
「あの人いるといないとチーム全然違うからね」
「そうそう、全然」
「だから早く復帰して欲しいわよね」
「もうすぐ二百勝だったっけ」
「ああ、それはまだ先みたいよ」
何気ない会話を続けていく。赤藤はやはりただ話を聞いているだけだ。
「まだ三十にもなっていないし」

「あれっ、そんなに若いの」
「だってあの人高卒だし」
変なことは知っている感じだった。
「一年目からガンガンやってるしね」
「ガンガンねえ」
「まあ確かに凄いピッチャーだしね」
それは彼女達もわかっているようである。しかしそれでもやはり他人事として話しているのがわかる。そんな会話が赤藤の耳にただ入っていく。
「投げ続けて欲しいんだけれど」
「怪我怖いわよ」
「そうそう、それそれ」
会話がさらに続けられていく。
「あの人怪我してるんだった」
「今更何言ってるのよ、あんた」
話がかなりぼけたものになっていた。
「あの人怪我してるじゃない」
「ああ、そうだったわね」
「そうよ。そこ要チェックよ」
あらためてそこが言われる。
「あの人それで今ああやって頑張ってるのよ」
「頑張ってるわね、確かに」
それは彼女達もわかる。今さっき話していたことすら忘れているような他愛もない会話であってもだ。それでも話されていくのだった。
「復帰して欲しいわね、本当に」
「そうそう、特にあの金満チームに勝ちまくって欲しいわ」
「私あのチーム大嫌い」
「私も」
「私もよ」

彼女達もあるチームが嫌いなようである。急に話がそちらに向かう。
「好き勝手ばかりしてお金で選手掻き集めて」
「それで優勝できないんだから無様よねえ」
「本当、そうよね」
そのチームに関する話が続く。
「何が球界の盟主なんだか」
「喪主でしょ」
「常勝球団じゃなくて嘲笑球団」
こうまで言う。五人が五人共そのチームを心から嫌っているのがわかる。
「何をやっても昔の栄光は戻らないのにね」
「馬鹿よねえ、本当に」
「けれどその馬鹿球団を倒してくれるのがいいのよね」
「そうそう」
また話は赤藤に関するものに戻った。取り止めがないが野球の話なのは間違いがなかった。
「本当に今年もね。頑張って欲しいわよね」
「そうよね」
女子高生達はそんな話をしていた。赤藤はその取り止めのない話を横耳で聞きながら走り続けている。一旦予定のコースを走り終えて川辺の土手に座って休む。するとその上の道に自転車が駆けて来た。
「んっ！？」
その自転車に乗っていたのはあの少女だった。髪の長いあの。今度は彼に顔を向けてきていて。自然と目と目が合ったのだった。
「君は」
「あんた、たしか」
向こうもそれを受けて自転車を止めてきた。そのうえで彼に声をかけてきたのだった。

「プロ野球選手の」
「ああ、赤藤さ」
自分を見下ろすその少女に対して述べた。
「赤藤雅夫。名前は知ってるよな」
「一応はね」
少女はぶっきらぼうに言葉を返してきた。言葉を返しながら自転車を止めて赤藤の横に下りてきている。見れば上は灰色のパーカーに下は青いジーンズとスニーカー、ラフな格好だった。
「最多勝やら何やら随分手に入れてるらしいな」
「まあな」
彼もそれは否定しなかった。
「今はちょっとあれだがな」
「ああ、怪我したんだったな」
少女の方からそれを言ってきた。
「それで今はリハビリか」
「まあそんなところさ。トレーニングだがな」
「随分大変だね」
赤藤の横に立ったまま言葉をかけてきたのだった。
「怪我をしたらスポーツ選手ってのはピンチだからね」
「まあな」
これもまた否定しなかった。川を見ながら苦い響きの言葉で答えるだけだった。

第三章

「俺は大丈夫だがな」
「悪いけれどそうは聞こえないよ」
しかし少女は今の彼の言葉は否定したのだった。
「何っ！？」
「あんたの今の顔を見ているとね」
すぐに反応して自分の方を見上げてきた赤藤に述べた言葉だった。
「とてもそうは見えないさ」
「気のせいだ」
赤藤はまずは強がってみせた。強がりだが自分にも言い聞かせている。
「それはな」
「どうだか。不安じゃないってはっきり言えるかい？」
「言えるさ」
また強がりであった。
「何度でもな」
「じゃあその右腕で」
少女もまた正面を見据えている。赤と銀色に輝く冬の夕刻の川辺を見ながら彼女も言う。
「小石を川に投げられるかい？」
「何っ！？」
「投げられないよね」
彼女が言うのはそれだった。今彼がとてもできないことだった。
「だったら安心とは言えないさ」
「まだそんな時期じゃない」
医者から言われたことを自分の口でも言ってみせる。顔は苦い顔で正面に戻った。
「だからいいんだよ、これでも」

「どうだか。実際何時投げられるかわからないんじゃないのかい？」
「すぐだ」
半分ムキになった言葉だった。
「すぐだ。だから」
「いいのかい」
「あんたに言われることじゃない」
また言葉が強がりになっていた。しかし今度は自分では気付かない。
「俺の問題だからな」
「だったらいいけれどね」
強がりに対する少女の返事は素っ気無くかつつれないものだった。
「それならそれでね」
「何が言いたい」
「別に」
嘲笑ってはいない。しかしやはりつれない響きの言葉だった。
「あんたの問題さ。ただ」
「ただ？」
「不安に押し潰されたら終わりだよ」
少女の今度の言葉はこうだった。
「それでね。終わりさ」
「ちゃんと手術もして治療も受けている」
そのことをあえて強調してみせた。
「何の心配もいらないさ」
「だといいけれどね」
「少なくともあんたに心配されることじゃない」
今度は完全にムキになった言葉だった。顔も少し俯き気味になりさらに苦いものになっていた。
「放っておいてもらいたいものだ」
「そりゃ放っておけっていったら放っておくけれど」
「だったらそれでいい。俺は俺だ」

次第に意固地な言葉になっていた。しかしこれも自分では気付かない。
「今年に復帰する。だから安心しろ」
「だといいけれどね。それじゃあ」
「帰るのか？」
「こっちも忙しくてね」
赤藤の横で踵を返しつつの言葉だった。
「家に帰って色々とやることがあるんだよ」
「色々と？」
「トレーニングさ」
こう赤藤に答えるのだった。
「それをしなくちゃいけないんだよ。この自転車だってその一つだけれどね」
「何だ、スポーツ選手だったのか」
「高校の部活なんだよ」
今度の返事はこうだった。高校生だという。
「陸上部。名前は」
「名前は？」
「楠未樹」
名前を名乗ってみせたのだった。
「それが私の名前だよ」
「楠未樹。陸上部か」
「そうだよ。覚えてくれたかい？」
「覚える必要はないが覚えたな」
ぶしつけに言葉を返した。こうした言葉になった理由はやはり今までのやり取りが大きな原因である。
「橘さんっていうのか」
「そうだよ。学校じゃ未樹って呼ばれてるよ」
「未樹か」
「どっちで呼んでくれてもいいさ。こっちはどっちでもいいしね」

「そうか」
「ああ。それでね」
その少女未樹は自転車のすぐ側まで来ていた。そのうえで赤藤に応えるのだった。
「また明日もここを走るんだよね」
「ああ」
未樹のその言葉に座ったまま頷いてみせた。
「そのつもりさ。走るのは続けるさ」
「それはいいことだね」
「スポーツ選手だからな」
それを理由としていた。しかし理由以上のものがここにはあった。
「走るのは好きだしな」
「へえ、意外だね」
「好きじゃないとやれないさ」
こうも言ってみせた。
「走らないとピッチャーになれないんだよ」
「そうらしいね。じゃあまた明日ね」
「あんたは自転車か」
「さてね」
今の質問には惚けてきた。
「どうなるかわからないね、それは」
「？どういうことだよ、それって」
「それは明日わかるよ」
やはり答えようとしない。赤藤はそんな未樹の言葉にどうも違和感を感じるのだった。
「明日ね」
「明日か」
「明日は絶対来るしね」
顔は見ていない。しかし声は聞こえる。その声がにこりと笑っているのがわかった。赤藤にも。

「その時わかるよ」
「明日か」
「そう、明日」
明日という言葉を強調する未樹だった。
「明日は来るからね」
「そうだな。生きている限りはな」
「生きていればね。じゃあまた明日ね」
「ああ、明日な」
未樹の言葉に頷く。後ろから自転車の音が聞こえる。赤藤は自転車のその音を聞きながら座り続けていた。しかし音が聞こえなくなるとゆっくりと立ち上がった。
「明日か」
明日という言葉がやけに耳に残る。その中で身体を動かしそれからトレーニングを再開する。川辺から目を離しランニングに入るのだった。
その次の日。また岸辺の道で走っているとその横に。一つの影が来た。
「んっ！？」
「こんにちは」
未樹だった。髪を後ろで束ねて青いジャージを着て走っている。

第四章

「今日も会ったね」
「自転車がないのか」
「気が変わったんだよ」
赤藤の横に来てこう答えるのだった。
「少しね」
「少しか」
「ああ、少しだよ」
声が少し笑っているのがわかる言葉だった。ただし表情は変わっておらずクールなものである。その顔で彼の横に来て走っているのである。
「少し気が変わってね」
「そうか、少しか」
「それで。右腕はどうだい？」
「右腕？」
「まだ動かせないか」
「動かすわけないだろう」
赤藤は走りながら憮然とした声で未樹に答えた。
「俺の右腕はまだ」
「手術が完治しても駄目なんだね」
「治ってすぐ動かせたら苦労はしないさ」
憮然としたまま答えた言葉だった。
「こんなにな」
「苦労ねえ」
未樹は赤藤の今の言葉に何かを思ったようだった。しかし表情には出していなかった。
「かなり苦労したんだね」
「その分勝ってはきているさ」

こうは答える。
「今までな。けれど」
「もう投げられないとか思ってないよね」
「何っ！？」
今の言葉にはすぐにカチンときた。むっとした顔で未樹に顔を向ける。だが未樹はそれを受けても顔を正面に向けたままで表情もクールなままであった。
「まさかとは思うけれど」
「思っているわけないだろう」
赤藤はそれは否定した。だが何故か必死の顔になっている。
「何でそう思うんだ。俺は六月に復帰するんだ」
「六月だね」
「ああ、六月だ」
自分でも六月と言う。彼はここでも気付いていないがやはり強がりになっている。
「六月に復帰するからな。絶対にな」
「本気ならいいけれどね」
「俺は嘘は言わない」
この言葉は本気だった。彼にも誇りがあった。
「それに何でこんな所で嘘なんか言うんだ」
「確かに嘘じゃないね」
未樹もそれは認めた。
「嘘じゃないけれどね」
「何か言いたそうだな」
「心の底じゃどうかね」
未樹はそこを指摘したのだった。走りながら。
「右腕を動かすのが怖いしそれで復帰したくないって思っていなかったらいいけれど」
「思っているものか」
「だったら」

未樹はさらに言う。
「走っている時も右腕を庇っているよね」
「むっ！？」
これは彼も気付いていなかった。言われて内心かなり驚いている程だ。
「何処がだ」
「右腕、全然動いていないね」
やはり正面を見たままの言葉だ。しかしそれでも未樹は言うのだ。
「それ見たら思ったよ。怖いんだね」
「だから右腕は今は」
「動かせないっていうんだね」
「その通りだ」
ここで彼は医者の言葉を自分の盾にしていた。実際にそれを言葉にも出す。
「医者にも言われた。安静にってな」
「安静にするのは大事だよ」
未樹もそれは認めてきた。
「それはね」
「じゃあどうしてそんなことを言うんだよ」
腹が立ってきていた。言葉にもそれが出ていた。
「下手をしたら動かなくなるだろ、そうしたら二度と」
「やっぱり怖いんじゃないかい」
「なっ！？」
また怖いと言われて。怒りはしなかった。そのかわり頭から冷水を浴びせかけられたような気分になった。それで言葉も止まってしまった。
「それが怖いんじゃない。私の言った通りね」
「怖い・・・・・・」
「大事にするのはいいさ」
未樹はまたしてもこれは認めた。

「けれどね。怖がったら駄目なんだよ」
「怖がったら」
「そう、怖がったら何にもならないんだよ」
未樹は言う。
「何にもね」
「そういうものか」
「あんた、怖がったら駄目だよ」
「俺は別に」
「今投げろなんて言わないさ」
未樹もこのことはわかっていた。しかしそれと共に。別のこともまたわかっているのだった。そしてこのことを今赤藤に対して語るのだった。
「けれど。怖がったら駄目さ」
「・・・・・怖がったらか」
「お医者さんから投げてもいいって言われる時期があるよね」
「ああ」
未樹のその言葉に頷く。
「もうすぐだ」
「もうすぐなんだね」
「もうすぐだけれどな」
「まず無理はしないことだよ」
前を見据えたままの言葉だ。しかしこの言葉は赤藤だけに向けられた言葉だった。今自分自身の横に走る彼に対する言葉だった。
「それと一緒に」
「怖がらないか」
「最初は何処で投げるんだい？」
「さてな」
その質問には答えない、いや答えられなかった。
「まだそこまで決めていないな」
「まだなんだね」

「まださ。けれどわかったよ」
そのうえでまた言ってきた。

第五章

「投げる」
彼は言った。
「投げる。何があってもな」
「投げるんだね」
「俺は投げるのが仕事だ」
言葉が続く。今度は自分自身ことを見ての言葉だった。
「だから。投げる」
「投げるんだね」
「考えてみればあれだよな」
前を見据えて走ったまま。未樹に言ってきた。
「誰だってあることだよな」
「怪我のことかい？」
「ああ、そのことだ」
このことを未樹に対して言っていた。横にいる彼女に。
「俺だけじゃない。誰でも一緒だよな」
「・・・・・・ああ」
何故かここで。言葉を鈍いものにさせる未樹だった。
「そうだね。それはね」
「？どうしたんだ？」
未樹の言葉が鈍いものになったことは赤藤も察した。それで彼女に目を向けて問うのだった。
「急に弱くなったな」
「いや、別に」
だが未樹は今度の言葉には答えなかった。何故か誤魔化してきたのである。
「別に。何でもないさ」
「そうか」

「ああ、そうさ」
未樹は前を見たまま答える。
「何でもないから。気にしなくていいよ」
「わかったさ。それじゃあ今日はな」
「どうするんだい？」
「ずっと走る」
彼は言った。
「ずっとな。ここを走るさ」
「他のトレーニングはしないのかい」
「それはまた明日だな」
やはり前を見ての言葉だった。
「それより今は」
「走るんだね」
「ああ、とことんまで走る」
もう決めた言葉だった。
「今日はな。それでいいよな」
「私に反対する権利はないよ」
答えるその声が微笑んでいた。
「決めるのはあんただしね」
「俺か」
「投げるのを決めるのもあんたさ」
このことも言い加える未樹だった。
「あんたのことを決めるのはあんただ。他の誰でもない」
「そうだよな。俺が全部決めるんだ」
「だから。走るのも自分が走りたいだけ走ればいいさ」
「好きなだけか」
「私はそれに付き合うだけだよ」
言葉がまた微笑んだものになっていた。その言葉を続けていく。
「今日は。何処までも付き合うよ」
「悪いな」

「いいさ。これも縁だよ」
「縁か」
「縁なら付き合う」
思いきりのいい言葉だった。それだけにはっきりとした強さがそこにはある。
「それだけだよ」
「あんた、今わかったけれど」
赤藤はもうその目を前に向けていた。前を向いて走りながら。そうしてまた未樹に声をかけた。
「何だい？」
「いい奴なんだな」
「今わかったんだね」
「最初は嫌な奴だと思ったさ」
本音を述べてみせた。ここで隠しても何にもならないとわかっていたからこそ。今は本音を述べるのだった。偽らざる己の本音を。
「けれどそれは誤解だったな」
「随分酷い誤解だよ」
「悪い。けれど今は違う」
このことも語るのだった。本音をそのまま。
「いい奴なんだな」
「褒めても何も出ないけれどそれでもいいんだね」
「ああ、構わない」
最初からそんなものは求めていない。だから本音を言ったのだった。
「全くな」
「いいね、その男意気」
今度は未樹が赤藤を褒めてきた。言葉が微笑んでいた。
「その意気だよ」
「その意気でやれってか」
「その意気があれば何の問題もないからさ」

こうも言うのだった。
「だからね。投げるのもね」
「そうだな。投げる」
そのことをまたしても決意する。そして。
「だから今は走る」
「その男意気でだね」
「ああ、走るさ」
言いながら走り続ける。既にその距離は普通の日のそれを超えている。だがそれでも走り続ける。その横にいる未樹を感じながら。
「今はな」
「今はだね」
「もうすぐまた病院だ。その時に」
言葉を続けていく。
「肩がどうか聞けるさ。ひょっとしたらもうすぐ投げられるようになるかも知れない」
「もうすぐなんだね」
「ああ、ひょっとしたらだけれどな」
こうは前置きする。
「それでも。俺はやっぱり」
「投げるんだね」
「ああ、投げる」
決意した言葉がまた出される。それはさっきのものより強くなっていた。
「絶対にな」
「投げればいいさ。けれどその時は」
「その時は？」
「私が見てもいいかな」
不意にこう言う未樹だった。
「あんたが投げるのを。見てもいいかな」
「ああ、好きにするんだな」

未樹の今の言葉を受けての返答だった。
「あんたが好きなようにな」
「じゃあそうさせてもらうさ。それじゃあ」
また走り続けていく。何があってもという感じで。
「その時にまた会おうな」
「楽しみにしているよ」
こう言いながら走っていく。二人並んで。この日はこのままお互い疲れ切るまで走った。それから数日後。彼は医者の診断を受けこう言われた。

第六章

「もう大丈夫です」
「大丈夫ですね」
「元々早期に見つかったものですし」
だから軽いものであったと。言葉にはこうした意味も含まれていた。
「もういけます。予定通り六月には復帰できますよ」
「そうですか、六月ですね」
「もう少し発見が遅れていたらあれでした」
「あれとは」
「今シーズンは絶望的だったでしょう」
深刻な顔になって赤藤に告げたのだった。
「もう少し遅ければ」
「そうですか。もう少しでですか」
「本当に運がよかったです。本当にあと少しでした」
「運がよかった」
今の医者の言葉には微妙な顔になる。しかし医者はさらに言葉を続けていく。診察室の中で向かい合って座る二人の間に緊張が走る。レントゲン写真が数枚あるがどれも右腕のものであった。他ならぬ赤藤の右腕のものであるのはもう言うまでもなかった。
「そうですか。運がよかったですか」
「ええ。六月に復帰できますから」
このことをまた赤藤に告げるのだった。
「本当に運がよかったです」
「じゃあ今からリハビリをしてそれから」
「ゆっくりと調整して下さい。大切なのは焦らないことです」
「焦らず、じっくりとですね」
「そこを御願いします」

重ね重ねといった感じで赤藤に言葉をかけていく。
「ここが最大の正念場ですからね」
「そうですね。下手に焦って投げても」
「今度こそ大変なことになります」
述べる言葉が強いものになっていた。
「ですから。御願いしますね」
「わかってます。やはりランニングを中心としてこれからも」
「はい。ですが」
「ですが。何ですか？」
「本当に走るのがお好きなのですね」
医者が今度言ったのはこのことだった。赤藤はとにかく何かあれば走る。このことは球界でもかなり有名でこのことを指摘したのである。
「ピッチャーは走ってこそですか」
「そうです。それもありますが」
そしてここで彼は。ふと言ってきた。
「別の理由が最近できました」
「別の？」
「約束です」
明るい笑顔での言葉だった。マウンドで勝利の時に見せる笑顔と同じだった。
「約束しましたから」
「約束！？」
「こちらの話です」
いぶかしむ医者に対して今度はこう述べた。
「こちらの。ですから御気になさらずに」
「そうですか。まあとにかく」
「慎重に調整をですね」
「はい、それだけは本当に御願いします」
「わかりました。それでは」

それに頷きようやく右腕の調整にも入っていく。といってもまだ投げない。彼は焦る気持ちを抑えて必死に、かつ慎重に調整を進めていた。そうして遂に。彼は決めた。
あの川辺にいた。そこにグローブとボールを用意している。川のすぐ側の芝生のところに立ち。今グローブを左手に嵌めていた。
その彼の上で自転車が止まる音がした。そこにいたのは。
「暫く振りだね」
「ああ、そうだな」
赤藤はその上に顔を向けて笑みと共に言葉を返した。そこにいたのはやはり未樹だった。
「最近見なかったがどうしていたんだ？」
「別のところを走っていたんだよ」
「別のところをか」
「学校でね」
こう赤藤に語ってきた。
「走っていたんだよ」
「そういえばあんた学校じゃ陸上部だったか」
「これでも長距離のホープなんだよ」
少し誇らしげに笑っての言葉だった。
「意外かい？」
「いや、別に」
自分の側に降りてきた未樹に対して述べる。
「それはな。身体見ればわかるさ」
「身体つきでわかるんだね」
「陸上選手には陸上選手の筋肉があるからな」
赤藤は言う。
「野球選手にも野球選手のな」
「やっぱりわかるんだね」
「わかるさ。だからあんたは走ってるんだな」
「その通りさ。あんたが投げるのと同じでね」

やはりクールな表情は変わらない。だが声はくすりと笑っていた。
「私だって走るんだよ」
「そうか」
「もっともあんたはいつも私と同じ位走ってるみたいだけれどね」
「ピッチャーだからな」
「いや、それでもだよ」
赤藤に対して言葉を言い加える。
「相当だよ、あんたの走る距離はね」
「そうだろうな。本当によく言われるな」
「自覚しているんだね。それで」
「本題か」
「今から投げるんだよね」
グローブとボールを見つつ赤藤に対して問うた。
「久し振りに」
「ああ、そのつもりだ」
未樹に対して答える。
「だから持って来たんだよ」
「そうよね、やっぱり」
「じゃあ聞くけれど何だ？」
赤藤の言葉が微笑んでいた。
「ボールは何の為にあるんだ？」
「勿論投げる為だよ」
「そうだな。それでグローブは」
「ボールを受ける為さ」
言葉は決まっていた。それ以外の何でもない。野球のことをあまり知らなくてもこの答えは決まっていた。それ以外にはないものであった。
「他にないじゃないか」
「じゃあわかるよな。俺がこの二つを持って来たのは」
「投げるんだね」

「とりあえずな。キャッチボール程度しかできなくても」
それでも投げるというのだった。赤藤の言葉は本気だった。
「投げてみるさ。久し振りにな」
「お医者さんからはいって言われたんだ」
「そうじゃなきゃ投げないさ」
不敵に笑っての言葉だった。

第七章

「今こうしてな。投げるさ」
「そうか」
「そうさ。約束だったよな」
「約束！？」
ここで彼は急に約束という言葉を出してきた。未樹もその言葉を聞いて顔を向ける。一体何のことかと思って話を聞くのであった。
「それって何のことだい？」
「だから。あの時言っただろ」
「あの時」
「あんた、覚えていないのか」
「ああ、悪いけれどね」
少しだけ申し訳なさそうに応えてきた。
「何のことか。少し」
「言ったじゃないか。また投げる時」
「ああ」
「見たいって。だからそれだよ」
「あっ・・・・・・」
言われてやっと思い出した未樹だった。実は今の今まで忘れてしまっていたのだ。彼にとっては軽い言葉である。しかしそれは赤藤にとっては。適えるべき約束となっていたのである。
「そうか。それだよね」
「ああ、今からそれを見せるな」
強い言葉で未樹に述べる。
「俺の投げる姿。今ここで」
「投げる姿を」
「悪いけれどあれだぜ」
前置きしてきた。言葉が少し申し訳なさそうになる。

「ピッチングフォームはできないけれどな」
「まだそれは無理なんだ」
「ああ、まだな」
これは断るのだった。
「それはな。それでだ」
「それでも投げるんだよね」
「ああ、投げる」
これは確かだった。今はまだ不充分でも。それでも投げるというのだった。もう逃げることはない。つまり不退転の決意の言葉だった。
「それでもいいのなら。見てくれるか」
「ああ、いいよ」
相変わらずの無表情だったが。それでも答えるのだった。
「それはね。別に」
「いいのか」
「約束。私は覚えていなかったけれど」
未樹は言う。
「あんたは覚えていた。だからね」
「いいのか」
「約束だからね」
だからいいというのだった。未樹は今赤藤の言葉を心の中で噛み締めていた。ただそれを表には出さないだけである。
「是非。頼むよ」
「わかった。それじゃあな」
「けれど」
だがここで。また言ってきたのだった。
「どうした？」
「グローブは一つかな」
不意に赤藤に尋ねてきた。
「よかったら。もう一つあるかな」

「グローブか」
「ああ、もう一つあるか？」
このことを赤藤に対して問う。
「もう一つ。よかったら私に貸して欲しいんだけれどね」
「それってまさか」
「キャッチボールだろ」
微笑んでまた赤藤に声をかける。
「一人じゃできないだろ」
「まあそれはな」
「だからだよ。よかったら私にそのボール受けさせて欲しいんだがな」
「そうなのか」
「駄目かな」
今度は尋ねてきた。赤藤に。
「それって。駄目だったらいいけれどさ」
「いや、構わないよ」
だがここで。赤藤は少しだけ微笑んで未樹に答えたのだった。
「丁度いい、グローブはもう一個あるんだよ」
「もう一個あったんだ」
「スペアでな。いつも持ち歩いているんだ」
そういうことだった。
「メインで使っている一個が潰れた場合にってな。用意しているんだよ」
「そうかい、用意がいいね」
「そうだよ。けれど用心していてよかったな」
「そうだね。それじゃあ」
「ああ。ほら」
ここでグローブを一個出してきた。それを未樹に手渡す。
「使えよ。それで俺のボール受けてくれ」
「ああ。あれっ？」

「どうした？」
「このグローブ右利きなんだね」
未樹が今度言うのはそのことだった。
「よく見れば」
「当たり前だろう、俺は右利きだぜ」
今度は屈託のない笑みで未樹に告げるのだった。
「だからそれも当然だろ」
「そういえばそうか」
「そうだよ。ひょっとしてあんた」
「ああ、実は左利きなんだ」
こう赤藤に答えるのだった。やはり表情は変わらないが。
「今まで黙っていたけれどね」
「今はじめて知ったぞ」
「言う必要もなかったしね」
考えてみればそうだった。今までは走っているだけだった。それでどうして利き腕が問題になるのか。妥当といえばあまりにも妥当な話であった。
「悪いね」
「いいさ、あんたが悪いんじゃない」
こう言って未樹を慰めるのだった。
「だからいいさ。けれど左利きか」
「ああ、いいさ」
今度は未樹が言ってきた。そのまま赤藤に言葉を返す。
「何とかやってみるよ。キャッチボール位ならね」
「できるか？」
「まあ大丈夫だろうね」
少し首を傾げてから述べた言葉だ。
「だから。やろうよ」
「ああ、わかった」
未樹の言葉を受けて頷く。こうして二人はキャッチボールをする

ことになった。まずは適度に間を空けて。そのうえではじめるのだった。
はじめる前にまた。赤藤は未樹に声をかけてきた。
「ところであんた」
「何だい？」
「ちょっと思ったんだけれどな」
こう彼女に言ってきた。
「何をだい？」
「あんた陸上部だよな」
「ああ」
その話だった。未樹もまた赤藤の言葉を聞いていた。しかしそれでもまだ投げない。ボールを握って投げようとしているだけである。まだ。

第八章

「そうだけれどどうしたんだい？」
「前に何かあったのかい？」
こう尋ねるのだった。
「前に。何かそんな気がするんだけれどな」
「私の過去の話ってわけだね」
「そうさ。ちょっとそんな気がするんでな」
「どうしてそんなふうに思ったんだい？」
「勘かな」
赤藤は首を少し捻って述べた。
「これはな。勘ってやつだな」
「勘かい」
「ああ、そうさ」
あらためて頷いてみせる赤藤だった。
「ピッチャーってのは勘が良くないと駄目って部分もあるんだよ」
「勝負だからね」
「そういうわけさ。怪我について色々詳しいみたいだしな」
「まあね」
ここで未樹は。そのことを認めたのだった。赤藤はそれを聞いても意外には思わなかった。その勘で察するものがあるからだった。
「それはね。中学校の頃だけれど」
「やっぱり何かあったか」
「交通事故に遭ってね」
こう赤藤に答えてきた。
「それで。リハビリとかも結構してね。大変だったんだよ」
「今の俺と似ているな」
「同じだったね」
同じだと言った。未樹の偽らざる本音であった。

「今のあんたと。だからわかったんだよ」
「そうだったのか」
「怖かったよ」
少し俯いて。表情を見せないようにしての言葉だった。
「また走るのが。ずっと動かしていなかったからね」
「それでも走ったんだよな」
「そうだよ」
そうしての言葉だった。その言葉と共に顔をあげてもみせてきた。
「先生とかに励まされてね。それで」
「いい先生だったな」
「それでも怖かったよ」
はしれるようにはなった。けれどそれでもと。未樹は言うのだ。
「走るまでがね。けれど走ってよかった」
「よかったんだな」
「そうさ。だから今の私があるから」
未樹は言う。
「走ってよかったよ」
「俺が同じなら」
赤藤はここでやっと右腕を上げた。いよいよ投げようとしていた。
「投げるべきだよな」
「受けるよ」
未樹もまたグローブをその顔のところに持って来た。キャッチボールの基本の構えだった。赤藤はそれを見ても未樹に対して声をかけるのだった。
「意外とさまになってるな」
「そうかしら」
「ああ、キャッチボールははじめてか？」
「子供の頃従弟に付き合ったことはあるけれどね」
「従兄弟！？従兄弟がいるのか」
「そう、一個下の。私は下に妹が二人いるけれどね」

さりげなく自分の家族のことも言った。
「従弟もいるんだよ」
「その従弟とキャッチボールをしていたのか」
「小学校の時にね」
「小学校か」
赤藤はそれを聞いて少し不安を覚えた。
「随分昔だな。大丈夫か？」
「何とかやってみせるよ。だから」
「ああ」
話はここまでにして。赤藤は腕を振った。上から下に。そうして遂に投げたのだった。
「おっ！？」
「どうしたんだい？」
「やぱりいいな」
投げ終えたその瞬間に。笑みを浮かべたのだった。
「投げるっていうのは」
「いいんだね」
「ああ、やっぱりいい」
ボールは高々と、そしてゆっくりと宙を舞う。久し振りに投げたせいかかなりゆっくりである。
「投げるのは。いいな」
「そうだろうね。わかるよ」
未樹もそれに応えて頷いた。
「私もあの時はそうだったし」
「そうだったのか」
「そうさ。最初は確かに怖かったけれど」
またその時の話になった。しかし今度は別の意味合いになっていた。
「それでも。いざ走ると」
「気持ちよかったか」

「今のあんたと同じだね」
また言った。
「そこのところもね」
「そうか」
「さて、ボールだけれど」
ボールはまだ宙を舞っている。山なりにゆっくりと。宙を舞い続けていた。二人は今度はそのボールを眺めていた。それぞれの目で。
「そろそろかね」
「悪いな、ゆっくりで」
「いいさ。久し振りなんだろ？」
「ああ」
もう隠さなかった。何もかも。
「あえてゆっくりに投げたしな」
「じゃあこんなものさ。これでいいんだよ」
「いいんだな」
「ああ、いいさ」
やっと落ちてきた。次第に速くなっていく。赤藤も未樹もそのボールを見上げている。
未樹はそのボールをゆっくりと受け止めた。左手に嵌めているそのグローブで。彼女がキャッチしたのを見て赤藤は微笑みつつ言うのであった。
「上手いな」
「そうかね」
「ああ、上手いさ」
そう未樹に言うのだった。笑顔と共に。
「野球殆どしたことないんだよな」
「ああ、そうだよ」
隠すことなく述べてみせる未樹だった。
「その通りさ。ずっと陸上一本さ」
「それでそれか」

「従弟相手にしていたからね」
「それでも筋がいいな」
赤藤はあらためてこう言うのだった。
「随分と。しかも左利きなのに」
「だってボール緩かったしさ」
ここで未樹の顔が変わった。その顔を見て赤藤は思わず言った。
「おい、今のあんた」
「？どうしたんだい？」
「笑ってるぞ」
彼が言うのはそれだった。
「笑えたんだな、あんた」
「あっ、笑ってる？私」
「ああ、笑ってるぜ」
穏やかな顔で微笑んでいたのだ。しかしそれを見ている赤藤もまた笑っていた。笑いつつ言葉をかけていくのだった。未樹に対して。

第九章

「にこりとな」
「そうなのか。笑ってるか」
「ずっと笑ってなかったからな」
そうなのだった。今の今まで笑ってはいなかった。未樹も今それに気付いたのである。
「それが今な。やっと」
「よく言われるんだよ」
照れ臭そうに述べる未樹だった。それでも今も笑ってはいる。これまでと違って。
「笑顔がないって。無表情だってね」
「学校でか？」
「何処でもだよ」
こうも述べる未樹だった。
「言われるんだ。どうしてもね」
「実際今まで表情が変わるとこ見なかったぞ」
「表情出すの苦手なんだよ」
ここでも表情を変えていた。苦笑いだった。
「どうしても。何も問題ないのにね」
「そうだったのか」
「けれど。今は違うんだよね」
「ああ」
未樹のその問いに対して頷いて答える。
「そうさ。笑ってるさ」
「笑ってるのか。そうか」
「自分でもわからなかったんだな」
「どうしてもね。気付きもしなかったよ」
今度は照れ臭そうな笑いだった。微笑みだが笑っているのは確か

だった。
「本当にね」
「けれどいい笑顔だな」
未樹のその微笑みを見ての言葉だ。
「何か見ているこっちまで嬉しくなるようなな」
「それはちょっと褒め過ぎなんじゃないのか？」
「いや、そうは思わないな」
しかし赤藤は未樹のその言葉は否定した。
「俺だって嘘は言わないさ。それにお世辞だって苦手なんだ」
「だろうね。そんなタイプには全然見えないしね」
「じゃあわかるよな」
また未樹に対して告げる。
「俺が褒め過ぎでも何でもないのはな」
「わかったよ。じゃあそうなんだよな」
「そうさ。今日はまああれだな」
「あれ？」
「はじまりだし焦らないさ」
こう言うのだった。その言葉と共に今度は未樹がボールを手に握ってきた。左手はグローブで塞がっている為右手を使ってだ。その彼女に赤藤はまた問う。
「利き腕じゃないけれど大丈夫か？」
「とりあえずやってみるさ」
右腕を上から掲げながら言葉を返す。
「投げてみる。いいよな」
「ああ、俺は別にな」
未樹にまた言葉を返す。
「受けられると思うしな」
「いいのかい？本当に」
「俺はただピッチャーのタイトル獲っていたわけじゃないんだけれどな」

また笑ってみせての言葉だった。
「ちゃんとあれだぜ。守備もできるんだ」
「守備もかい」
「ゴールデンクラブだって獲ってるんだぜ」
ここでグローブと手をゆっくりと打ち合わせる。意識してその打ち合わせる動作はゆっくりさせている。やはり右手を大事にしているのだった。
「何度もな」
「守備もいいっていうのか」
「そうさ。だから安心してくれ」
「わかったよ。それじゃあ」
未樹は赤藤のその言葉を聞いてまた微笑む。今度は安心したような笑みだった。こうして見ると意外に表情豊かだと。彼は思うのだった。
「投げるよ」
「ああ、来い」
赤藤に応えて投げた。投げたボールはゆっくりと放物線を描いている。さっき赤藤が投げたあのボールと同じだった。赤藤もそのボールを見ている。
「ところで」
「何だい？」
「俺はこのまま少しずつ投げていくぜ」
「ああ」
「それでな。復帰は」
復帰の話を出すのだった。ここで。
「六月に戻るぜ」
「六月なんだね」
「ああ、そのつもりだ」
それを目指していた。もう決意していたのだった。
「何があってもな」

「そうか。じゃあ頑張るんだね」
「それでな」
ここでまた赤藤は言う。ボールは高々とあがっていく。
「一つ言いたいことがあるんだけれどな」
「今度は何だい？」
「六月に復帰するだろ」
「それはさっき言ったよ、今さっき」
「だからな。それでだよ」
未樹に突っ込まれたがまだ言うのだった。
「その復帰戦、来てくれないか」
「私がかい？」
「ああ、そうだよ」
こう未樹に対して言うのだった。
「チケット用意しておくからな。それでな」
「呼んでくれるんだね」
「いいか？」
「いいよ」
未樹は今度も笑った。これまで以上に明るい笑顔で。
「是非。行かせてもらうよ」
「そうか。じゃあその時は絶対に勝たなくちゃな」
赤藤もまた未樹と同じ笑顔になっていた。
「何があってもな」
「復帰でいきなり勝利投手か」
「俺はいざって時には絶対負けないんだよ」
自信が戻ってきていた。もう投げている時の赤藤になっていた。
「ここ一番の大勝負でも日本シリーズでも。常に勝ってきたんだよ」
「そうだったんだ」
「そうさ。その時のウィニングボール」
完全に予告だった。
「楽しみにしていろよ」

「そうさせてもらうよ」
二人は同じ笑顔で頷き合った。二人は誓い合った。これからの野球のことを。そして六月復帰を果たした彼は見事白いボールを未樹に手渡すことができた。誰も知らない復活劇である。

エース　完

２００８・６・３０

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8048e/

エース

2010年10月8日15時30分発行